

富栄養化が進みアルカリ性を示す水域まで広がっていると言う。しかし香川県の場合、香川植物の会の和気俊郎によれば、かつてはタヌキモ類が平野部の溜め池にも相当数生育していたとの事で、生育環境の富栄養化が、平野部に少ない現在の分布状況をもたらした事も十分考えられる。従って、これらを総合的に推察すると、香川県のタヌキモ池の環境は、貧栄養域から中栄養域にあるものと考えられる。

湿生植物は、新川水系の調査では基本的には対象外であり、タヌキモ池で記録されたハリイ spp.、スイラン、ミミカキグサ類、ミズオトギリ、ノハナショウブ、オニクグを直接的に比較することは出来ない。ただこれらの種は、香川県では比較的環境条件の良い山間部の湿地に残存しており、タヌキモ池の環境を指標する1つの資料として考慮することは出来よう。また水べりに生育しているミズユキノシタとホソバノウナギツカミは、水位変動の影響により、調査対象としての精度が一定していないため、ここでは取り扱わなかった。ただイヌタヌキモの1生育地で、ホソバノウナギツカミが完全に沈水植物として30%程の被度で生育していたのは特異的であった。

摘要

1. 香川県内に生育するタヌキモ類について、標本に基づく分布図を作成し、タヌキモ類と同時に生育している水生植物の調査を行った。
2. 香川県内には、ノタヌキモ、イヌタヌキモ、ヒメタヌキモの3種が生育していた。ノタヌキモとイヌタヌキモの分布は全县に渡っていた。タヌキモの生育は確認できなかった。

福井県のエゾヒルムシロはフトヒルムシロ？

角野康郎

渡辺定路氏のまとめられた『福井県植物誌』(1988)を紹介したとき(会報 No.37, 4p)、同定が気になる水草が2,3あることを指摘した。“エゾノヒルムシロ”(306p)はそのひとつであったが、このほど京都大学の標本庫に送られていた渡辺氏の標本のうち“エゾノヒルムシロ”と同定された2点を見ることができた。1点は植物誌にも引用されている勝山市取立山 (No.11347)、もうひと

3. 香川県のタヌキモ池の環境は、同時に生育する水生植物の種構成から、貧栄養域から中栄養域にあるものと推察された。

文献

- 角野康郎. 1985. ノタヌキモの生態. 水草研究会報 22 : 5—8.
- . 1987. 兵庫県南部のジュンサイ群落. 中西哲博士追悼植物生態・分類論文集 : 165—173, 神戸群落生態研究会.
- 久米 修. 1982. 香川県の水生植物目録. 水草研究会報 10 : 8—10.
- . 納田美也・和気俊郎・大石泰輔. 1987. 新川水系のため池における水生植物相. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(新川水系のため池) : 16—42, 香川県.
- . 1988. 香川県におけるオニバスをとりまく水生植物相. 水草研究会報 33 : 34 : 34—39.
- Komiya S. and Shibata C.. 1980. Distribution of the Lentibulariaceae in Japan. Bull. Nippon Dental Univ., Gen. Educ. (9) : 163—212.
- Miki S.. 1935. New Water Plants in Asia Orientalis III. Bot. Mag. Tokyo 49 : 847—852.
- 大野睦子. 1990. 北九州市産のイヌタヌキモの変異と生活史. 水草研究会報 42 : 12—20.
- 内山 寛. 1987. 広島県のノタヌキモの産地. 水草研究会報 27 : 20.
- 山本功人・角野康郎. 1988. 兵庫県南部におけるタヌキモとイヌタヌキモの分布. 植物地理・分類研究 36 (2) : 72—75.

つは南条郡今庄町夜叉池古池 (No.13969) で採集されたものである。これらの標本は、浮葉が小さくかつ沈水葉は無柄なのでエゾヒルムシロと同定されたものと推測するが、まぎれもなくフトヒルムシロである。植物誌に引用されている和田山 (29851, 29852) の標本は見えないので、福井県にエゾヒルムシロが産する可能性を否定はできないが、私自信の調査経験からはこれらもフトヒルムシロの可能性が大きいと考えている。今後の検討が必要である。